

【熊本県賞】

日本の水と世界の水

熊本県 学校法人鎮西学園真和中学校 二年 角居 菜々子

「水の作文を書く」という課題を聞いて最初に思いついたのは、小学生の時、熊本市の水はほぼ百パーセントが地下水でまかなわれていると学んだ経験だった。つまり、私の住む家の蛇口をひねるとすぐに、阿蘇の伏流水のもたらすミネラルウォーターが飲めるというわけである。そのありがたみを痛感した経験が私には二つある。一つ目は海外に旅行に行った時のこと。もう一つは熊本地震での体験だ。

数年前、上海へ家族と一緒に旅行に行った。空港は大きく美しく、付近の建物もホテルも近代的でとても立派だったことを覚えている。しかし、唯一国内旅行と違う点を挙げるとすれば、母から水道水は飲まないよう強く念押しされたことだった。確かに、ホテルにはペットボトルに入ったミネラルウォーターが何本も用意されていて、お茶もコーヒーもそれを使って飲むようになっていた。また、訪れた施設でも飲料用の水は別に設置されており、来た人は皆用意した水筒にその水を入れて飲んでいたようだった。この経験は、どの国でも日本と同じように水道水が飲めるわけではないのだということ私が強くと実感する機会となった。

私が水の大切さを痛感した二つ目の経験は五年前の熊本地震だ。それは普段なら水道の蛇口から水が出るという当たり前のことが当たり前ではなくなつた出来事だった。トイレを流すのは念のためにとお風呂に溜めておいた水だけが頼りだったし、家にある大きめの容器をありつたけかき集めて水を溜めた。ほんの数時間の小さな断水なら経験がないわけではなかったが、「水が足りなくなるかもしれない」という恐怖心を抱いたのはこれが初めての経験だった。

今やあらゆる場面で耳にするようになった「持続可能な開発目標（SDGs）」とは、二〇三〇年までに、持続可能でよりよい世界を

目指そうとする国際目標である。これは一七のゴールで構成されているが、その六番目には「安全な水とトイレを世界中に」という目標が設定されている。調べてみると、世界の人口の四人に一人が衛生的な水を使えず、三人に一人がトイレのない環境で暮らしているのだという。水がないことで、女性や子供は一日の大半を水汲みに費やすことになり、それによって教育を受ける時間を奪われている。また水が衛生的でなかったり、整備されたトイレがなかったりするために病気のまん延が起こる。今回の新型コロナウイルスの拡大を阻止するためには石鹼を使いしっかりと手洗いをすることが重要だが、その水さえないのである。つまり、水の問題はすなわち命の問題なのだ。

では、今の私にできることは何であろうか。一つは、大切な熊本の地下水を守るために、日々の生活の中で節水を心がけることだろう。歯磨きをするときはどうか。シャワーを使うときは？細かいことではあるかもしれないが日々の暮らしの中では、こんな小さな心がけをさらに意識する必要があると思う。二つ目は、水を取りまく世界の現状に関心を持ち、それを調べたり、調べたことを家族や周囲の友達に知らせていったりすることだ。何事も知らなければ課題意識は生まれなからだ。

今回私は、「水」の大切さを考えるときにも、この「水」を取りまく世界の現状を少しだけ知ることができた。この有限の「水」という資源を私たちがいかに有効に使うか、そしてそれをより良い形で循環させて私たちのあとに続く人たちにつないでいくか。これからも、しっかりと考え、伝え、できることを実践していきたい。